「蛇籠」でネパール治水支援　高知大がＪＩＣＡ新事業

護岸工事やマップ作成へ

高知大学が、県内の治水などに使われてきた「蛇籠（じゃかご）」の技術を使って、水害に悩むネパールを支援することになった。国際協力機構（ＪＩＣＡ）の事業で２０２４年８月まで３年間、地元住民とともに、蛇籠を用いた護岸工事やハザードマップの作成、避難訓練などに取り組む。

蛇籠は金属製のワイヤで編んだ籠に石を詰めたもので、川岸などに並べて補強する。ネパールでも堤防などに使われているが、強度や施工方法に基準がなく、たびたび崩壊。毎年のように耕作地に土砂が流入する水害が起きている。

高知大は15年のネパール地震で、蛇籠を使った道路ののり面復旧を支援。その際、地元住民から河川防災への協力も要望され、ＪＩＣＡに提案し「草の根技術協力事業」に採択された。予算は上限約９千万円。

支援先となるネパール中部のゴルガ地域では、洪水が年４～６回起きているという。新型コロナウイルス禍のため、当面はオンラインで会議やワークショップを開き、感染が収まり次第、現地で活動する。

18日、高知大でオンラインの初会合が開かれ、プロジェクトマネジャーの原忠教授らが現地のコーディネーターと支援内容を確認し合った。

原教授は「蛇籠は非常に簡単で安く、機能性に優れている。ハード、ソフト両面で支援し、人命と生活基盤を守りたい」と話した。

（村上和陽）

ネパールへの河川防災の支援内容をオンラインで話し合う関係者（高知市の高知大）